(楊 健)

博士論文審査の要旨:

この論文は，現代日本語における自他両用漢語動詞の用法について考察したものである。和語動詞に関しては，「閉じる」「開く」「伴う」「増す」のような自動詞用法と他動詞用法を併せもつ，いわゆる自他両用の動詞は少数に限られるが，漢語サ変動詞には自他両用とされる動詞が数多く存在する。また，かなりの割合の和語動詞で，「立つ・立てる」「割れる・割る」「始まる・始める」「流れる・流す」のように，語源を同じくすると見られる自動詞と他動詞が対になっていて，形態が自他を判別する手がかりとなりうる。これに対して，漢語サ変動詞の場合は「(漢語) する」という一つの形態しか持たないため，形態的な自他判別の手がかりがない。このことから，日本語の学習者にとって，漢語動詞の自他を判別することはきわめて困難と思われる。

この論文は，国語辞書および「現代日本語書き言葉均衡コーパス (中納言)」を使用して，実例を基に自他両用の漢語動詞の用法を記述し，そこから動詞の意味と自動・他動に関わる一般的な傾向，法則を究明することを目標とする。まず漢語動詞をめぐる先行研究を概観し，従来の自他両用の定義を示したうえで，当研究の立場，先行研究との関連性を述べる。続いて，国語辞書において「自他サ変」とされる漢語動詞に着目し，それらの動詞が「自他両用」動詞にあたるか否かについて考察する。そして，真に自他両用と見るべき漢語動詞 (「計画 {が／を} 実現する」) にも，自動詞と他動詞の用法のいずれかに偏る傾向がないかを調べる。日本語母語話者を対象とする，自他両用漢語動詞の用法に関するアンケートも実施する。さらに，自動詞専用の傾向のある動詞，他動詞専用の傾向のある動詞の用法における制限について考察する。以上に加えて，自他両用の漢語動詞のうち，特殊な用法が見られる動詞 (「サイト {が／を} 移動する」「水面を移動する」「委員長が意見を答申書に反映する」「答申書が意見を <答申書自体に> 反映する」) に注目し，そこに認められる規則について説明する。

「意見が答申書に反映する」

審査では，先行研究の提示から研究史の記述へと進めないか，自動詞用法が優勢な動詞の他動詞用法に見られる制限 (「?医師が患者の健康を回復する」) と，他動詞用法が優勢な動詞の自動詞用法に見られる制限 (「?契約が更新する」) とを，統一的に説明する概念はないか，コーパスの調査結果とアンケート結果との相違の原因をどのように説明すべきか，話し言葉のコーパスも用いるべきではなかったかなどの指摘があった。しかしながら，従来の国語辞書の不備に対する的確な批評，さまざまな立場の先行研究を理解して幅広く参照した点，自他両用漢語動詞の実際の用法をコーパスに基づいて明らかにした点は，高く評価できる。この論文が取り扱う言語現象は，日本語史上での変化の過渡期にあると考えられ，研究としての将来性も大きい。以上の理由をもって，本論文はその著者に博士 (文学) の学位を授与するに値するものと判断した。